

最優秀賞

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「神様からの贈りもの」

愛媛県・新田青雲中等教育学校5年 井上奈々

「奈々ちゃんのお父さんの歩き方、おもしろいね」。ある朝、一人の小さな女の子があどけない笑顔と共に言った。まだ幼かった私。暑い日の事だったが、私の心には一瞬にして冷たく鋭い物が突きささった。悲しいという感情は不思議と湧いてこなかった。悔しい。ただそれだけ。悔し涙が自然とあふれた。あの時、父は彼女の言葉を背に何を思ったのか。

私の父は障害者だ。障害者の中でも、身体障害者。略して身障者。父は生まれてすぐ、足に障害を負った。父はこれまでの人生の中で走った事は一度でもあるのだろうか。いや、周りと同じ歩幅で歩けた事はあるのだろうか。

覚えているだろうか。幼稚園での運動会を。必ずと言っても過言ではないほど、お父さんやお母さんと出場する競技があるのを。私も弟も父とは一緒に出た事はない。隣にいるのは祖父であった。私はその事を恨んだ事は一度も無かった。弟だってそうであろう。父も、一緒に出られる事はなかったが、必ず行事には来てくれていた。あの朝までは。あの朝の一件以来、父は参観日には来なくなった。朝の見送りに絶対に来なかつた。なぜだろう。私は正直寂しかった。

その理由を私を知る事になったのは、それから数年後の事だった。父は自分の足をバカにされるのが嫌だったのではなかった。父は自分の足のせいで、私が嫌な思いをしないようにと、自粛したらしい。本当は朝の見送りにだって、参観日にだって来たかったそうだ。それが私の事を思い、娘を傷付けまいと考え出した父の選択。私の胸には、言葉にならない思いが込みあげてきた。

では、私はどうなのか。その事を知ってから、自ら父を行事に誘

う事は無かった。父の足を恥ずかしいと思っているからなのか。いや、違う。私は父の足を恥じた事はない。足なんて、歩き方なんてどうでも良い。父は父なのだから。ならば、なぜ。

答えは一つだ。心無い言葉によって、これ以上父に傷ついて欲しくなかつた。クラスの誰かが、周りの誰かが父の事をバカにするのではないのかと思っている訳ではない。そんな人はいないと信じたい。でも私と父は、これまでにたくさんの心無い言葉や行動をまのあたりにしてきた。スーパーに買い物に行けば、足をじろじろ見られたり、笑われたり。父の歩き方を見て何かをささやき合う人もいた。そればかりか、普通に聞こえるように酷い事だって言われた。小さな子だけでなく、大人の、老人にまでもだ。私はその度に、聞いてやりたくない。あなたは父の何を知っているのか。何がおかしくて笑うのか。どうして笑う事ができるのか。私は不思議でたまらない。なぜなら、父には笑われるようなものは何もないのだから。

父は今、たくさんの病氣と闘っている。腰、肝臓、そして心臓。死にかけた事だってある。これからだって治る事はないと言われた。そんな時、母はこぼした。「なんで、お父さんばかりがこんな目に遭うのか。生まれてからずっと足で苦労してきたのに」。確かにそうだ。でも、これは神様からの贈りものだと思う。幸せを与えてくれる贈りものではない。むしろ、難題ばかりを与えてくる。でも、それを乗りこえれば、誰も感じる事ができるだろう。私達家族だって同じ。これまで、父を支えるために助け合ってきた。絆は強い。それは自慢できる。これも贈りもののおかげなのかな。

私は思う。人生、山あり谷あり。たくさんのチャンスがあるだろう。それを生かすも殺すも自分次第。だったら生かしてみせよう。父のように。父みたいに強く生きていきたい。

今の社会は、障害者に対しての偏見があふれている。ありえない。障害者の人は、自分達が知らないものをたくさん知っている。私達はおくれをとっているのだ。それなのに、なぜ笑えるのか。違うだろう。考えなおしてもらいたい。そして、障害者に対する偏見を消し去るために、私は生きていきたい。